

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 4 月 17 日現在

機関番号：18001

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2011～2012

課題番号：23830036

研究課題名（和文） 三六災害後の山村内における共同性の変化と復興災害に関する地域社会学的研究

研究課題名（英文） A regional sociological study on a transition of the communal after a huge disaster and residents' suffering from reconstruction of their village

研究代表者 越智 正樹 (OCHI MASAKI)

琉球大学観光産業科学部・講師

研究者番号：90609801

### 研究成果の概要（和文）：

記録の大災害から 50 年を迎える長野県下伊那郡大鹿村を対象とし、特に復興のシンボルとされた崩落跡地の桜公園が形成されるプロセスについて分析した。結果として、現在広く語られるストーリーにおいては不可視化されている共同性が発生していたことが明らかになった。これは現在の共同管理が唯一の必然的な形態ではないことを示唆するものである。その成果は、当地の履歴に根ざしたさらなる復興のための基盤、ならびに他地域における復興の想像力を高める基礎を提供するものである。

### 研究成果の概要（英文）：

The object of this study was to analyse the process of the reconstruction at Oshika village, Nagano, Japan, where a huge disaster occurred in about 50 years ago. The research especially focused on the process of reforming the disaster site as a public park filled with cherry blossoms, which came to be the symbol of their reconstruction. As a result, it was found that there had been some communal relationships arose through the process, which is now invisibilized in the general story of the reconstruction. This result shows that the existing style of communal management of the site is not the sole, necessary one, and contributes to enhance our imagination for a development or a reconstruction at this village, and the other disaster area as well.

### 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2011 年度	400,000	120,000	520,000
2012 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総計	900,000	270,000	1,170,000

研究分野：地域社会学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：三六災害、復興、共同性、地域社会、公園化

#### 1. 研究開始当初の背景

筆者が調査地とした長野県下伊那郡大鹿村に初めて訪れたのは、2011 年 3 月 4～5 日

であった。あるコミュニティ調査班の仲間たちとともに、わずか 1 泊の視察を行っただけであったが、その際に偶然出会ったある村民から、「あそこに見えるところは、桜の公園

なんだけれど、むかし大雨で山津波があり、たくさんの人が生き埋めになった場所なんだ。その災害から今年ちょうど 50 年になる」といった話をうかがった。その際にはなるほどと思い、若干の興味は抱きつつも頭の片隅に置いただけであったが、それから約 1 週間後の 3 月 11 日、東日本大震災が発生したのであった。

むろんこれは、この日付だけで語り切れる災害ではなく、あまりに複合的な災害が連鎖的に発生したものであり、その甚大さの前で思わず思考停止してしまいそうになりながらも、筆者は筆者なりに、研究者たる自分に何ができるのかを自問自答した。同様に使命感を抱いた多くの研究者たちは、次々と震災被害の地へと調査に入っていた。そのことの意義は疑いようもない。ただ同時に、予想されたことと言うべきか、復旧の手がかりすらつかめない状態で生きる人々のところへ、全国から数多くの研究者が押し寄せることにより、いわゆる「調査地被害」が深刻化している、との情報も入るようになった。

この状況を鑑み、当時京都にいた筆者は考えた。今次の被災地にはすでに多すぎるほどの研究者が入っている。この現地調査は、これらの研究者たち、とくに震災前から当該地とかかわりを有してきた研究機関や研究者たちに任せたいほうが良い。筆者がすべきことはむしろ、すでに災害後の復旧・復興過程を経た十分な年月がある地域において、その復旧・復興の正負両面を地域社会学的に詳らかにすること、これを通じて今次災害の復旧・復興について、先例に基づいた知見を提供することではないか。このように考え、あらためて災害後 50 周年を迎える大鹿村の事例に興味関心を抱き、調査に着手することにしたのである。

## 2. 研究の目的

大鹿村が 50 年前に経験した災害は、「昭和 36 年梅雨前線豪雨」、通称「三六災害」と呼ばれるものである。この豪雨による罹災は、長野県を中心に広がったのだが、なかでも特に甚大な被害を受けたのが大鹿村であった。

大鹿村では、総世帯約 1050 戸のうち実に 518 戸が罹災し、重軽傷者 621 名、死者・行方不明者 55 名となり、「県下第一の被災地」と呼ばれ「死の村と化した」とすら言われた。わけても衝撃的だったのが、村の中央部付近にある大西山の大崩落である。地形が一変するほどの巨大な山津波は、山裾にあった家屋や田畑を瞬く間に呑み込み、約 40 名が生き埋めとなったのである。また、河川氾濫による被害の大きかった村北部では、121 世帯が村外への集団移住を余儀なくされた。さらに忘れてならないのは、「復興」の過程におい

て、治水目的を前面に押し出したダム建設を村も受け入れ、その結果として 1 つの集落が解散させられ、ダム湖に沈んだことである。

この大災害を契機として大鹿村は、人口凋落と第一次産業衰退の一途を辿ることになった。その一方で 1970 年代からは、ヒッピー運動において注目を集め、多くの都市出身者が移住するようになった。これら移住者の一部は現在も居住しており、福祉コミュニティの中核となるなどしている。また、1. で述べたように、大西山崩落跡にできた台地には桜を植樹する運動が村民の中から広がり、今では公園となってアメニティと鎮魂の場所として村民に共有されている。

災害と復興の社会学は、喪失したものを生存者がいかに位置づけながら、生活世界をかるうじて再構築するのか、に注目する必要がある。と同時に、災害が去ったあとの苦しみ（「復興災害」）を避ける方策について、議論を尽くさねばならない。災害後の復興方策に関しては、科学技術的見地が優先されがちだからこそ、そこから漏れ落ちる人々の「復興災害」を減災するための社会学的知見を高めることが重要である。

大鹿村の場合、復興のシンボルとされたのが大西山の桜公園化であった。その公園化、さらには桜の植樹という行為が、村民のどのような共同性の（再）構築を通じて成し遂げられたものであるか。逆に、この桜公園化のプロセスが、どのように共同性を（再）構築したのか。さらには、この桜公園が復興のシンボルとして焦点化されることによって、逆に不可視化されているものは何か。このようなことを明らかにしていくことを、本研究の目的とした。

## 3. 研究の方法

上述のような目的を達成するために、以下のような諸点に焦点を当てて明らかにしていった。手法としてはいずれも、関係村民に対するインタビュー（被災農地の組合長、被災林野の元地権者、公園化にかかわった人物、元村長、元婦人会役員、崩落箇所近隣集落住民など）、および村役場や公民館における史料の収集を行った。

### (1) 大西山崩落地付近の災害前と後における土地所有関係の変化

崩落地近辺は、「村随一の米蔵地帯」と呼ばれた水田および山林の私有地、河川敷ならびに山裾の公有地が存在する箇所であった。これが復旧工事により、河川流路が大きく変更され、かつ崩落土砂を一部撤去しきれず台地化されたことによって地形が大きく変貌し、地籍に大きな混乱を及ぼした。実際のところ、公有地と私有地との境界を決すること

ができない箇所が、災害後何十年も残ったのである。

被災箇所を公園化していくプロセスにおいては、植樹という可視化しやすい行為だけでなく、こうした所有関係の衝突と調停とが不可欠なのであって、まずこの実態をインタビューならびに資料から明らかにしていった。

(2) 崩落跡地の利用案が村有の桜公園として一本化していった経緯

村や河川事務所などによる既存の記念誌は一樣に、桜植樹が1名の村民による努力が輪を広げたかたちで進んだ、というストーリーを描いている。それが嘘だというわけではないが、しかし実際の歴史は往々にして、そうした単線的な美談で描かれるような経験ではない。後日に再構成された単線的な美談は、他地域での参考に供するには大きな限界があるのみならず、他にあり得た共同の様式、さらには現状に対する不満や忸怩たる思いを不可視化してしまう傾向がある。そこで本研究の目的からしても、なぜこの台地が公園化され、とくに桜の公園として一本化されていったのか、その経緯について、当時を知る人々へのインタビュー、ならびに資料から明らかにしていった。

#### 4. 研究成果

本研究の成果として明らかにしたのは、(1) 現在では復興のシンボルとされている桜公園がいかにして成り立っていったかのプロセスであり、(2) そのプロセスにおいて発生した共同性はいかなるものであって、そのうち現在語られる公園化ストーリーにおいて不可視化されているものは何か、であった。以下、順に説明しよう。

##### (1) 復旧・復興プロセスの詳細

崩落した大西山の土砂は、当時「村随一の米蔵」と呼ばれた水田地帯を呑み込み、近隣集落にまで及んだ。復旧はまず、この大量の土砂の撤去と水田の復旧から着手された。この水田地帯は特定集落の領域ではなく、複数集落の農家の所有によるものであった。この水田地帯の復旧は、既存の営農組織が調整機能を発揮することにより成し遂げられた。問題は、このような共同性発露の言わば残滓となった、山手側に残された崩落岩塊台地だったのである。新河川流路の山側に、撤去し切れなかった土砂を寄せ集めるかたちで造られたこの台地は、地籍もなく、共同管理する主体も当然存在しなかった。この土地がいかにして、「村のシンボル」たる「公園」となったのか。

大西山崩落跡の岩塊台地が「大西公園」と

なるプロセスは大きく4つの時期に区分できた。第1期(1965年頃まで)は、復旧事業により岩塊台地が造成され、復興記念式典が開催される頃までの時期である。この時期は、村民が憎しみや悲しみの感情をぶつける対象として「大西山」があった。その感情の区切りを刻むモニュメントの建立が村によって行われ、その前後から山林地権者が個人的復興としてマツ植樹を始めた。すなわち、私的感情が共有される集積点として「大西山」という場所があり、その感情の昇華がこの場所で公的に表現される一方、必ずしもその共有に属さない個人的行為として台地への植樹が始まった。

第2期(1965~1970年頃)はその後、所有関係の議論が活発化するまでの時期である。最初期は、むつみ会(五十歳以上婦人任意)の婦人ら「村中の人」が、庭の土や思い思いの草花などを運び込み、植えては1つ1つに自分や子どもの名札をつけた。村事業や老人クラブ独自活動としてツツジも植えられた。サクラもこの時期、むつみ会により初めて植えられた。この時期は、村や生活組織や個人の、どのアクターがイニシアティブを握っていたというのでもなく、災害の爪痕を生々しく晒す台地に対し、ただ霊を慰めたい、岩塊を綺麗にしたい、という思いが共有されていたと言えよう。村の観光予算による事業も、権威づけられた行為とはなっておらず、諸活動の一部として包含されていた。と同時にこうした緑化活動は、「名札」に見られるように、単に慰霊の共同行為にとどまらず、各個人が台地と新たな関係性を結ぶことを志向するものでもあった。

第3期(1970~1976年頃)は、台地利用と官民境界の問題が顕在化し、サクラ植樹が台地利用の第一義となるまでの時期である。村と村議会は、台地利用管理は村がイニシアティブを握るべきだと認識した。その背景にあったのは、地籍のない土地の所有者の権利問題であった。村と地権者とは、「村民広場」案と「ドジョウ養殖場」案において直接対立し、一方でゴミ・尿尿処理場設置については合意したが、後者についても周辺住民の環境被害問題が生じた。いずれの場合も調整を検討するには、まずもって当該地所有権の不明瞭さが障壁となっていた。一方この時期、台地は村民間において「公園的存在」感を増していたが、同時に盗掘および再植樹・管理の不足により「花木が無くなっている」状態であった。すなわち、村が主導的管理を志向し、村民は「公園的存在」感を覚え始めていたものの、当の台地では草木の管理が行き届かず、またゴミ・尿尿の悪臭が「殉難之碑」も包んでいることは問題化されていなかった。サクラ植樹は、1人の特異な個人の行為となっていた。

第4期(1976~1981年頃)は、Xが村内中学校と共同でサクラ植樹を始め、「大鹿村桜の会」が発足するまでの時期である。村は台地の約1/3で「村長境界」を引き、所有関係を暫定した上で村民運動場を設置した。残りの、依然として境界不明瞭な土地では、Xのサクラ植樹が中学校の協力を得て、個人的行為の枠から広がり始めた。その広がりを一気に加速し決定的なものとしたのが、「日本さくらの会」の参与であった。すなわちXの活動は、国全体を表象する村外団体から「日本人とさくら」の一環として承認され、そこから雪崩を打つように台地の「村のシンボル」化、その利用管理の中核としての「大鹿村桜の会」発足、「大西公園」の命名(1984年)がなされたのである。

### (2) 共同行為の多重性と非-必然性

先述のようにこの台地は、既存の生活組織的対応が島川原に対して発揮されたのに対し、言わばその残滓として形成されたものであり、共同管理する主体も存在しなかった。それが第1期から第2期にかけて、私的な感情や関係性が集積し共有される結節点たる場所として構築される。第3期には「大鹿の公園的存在」といった感が村民に広まるが、一方で当地の管理が弱化したのもこの時期であり、最前面にあったのは所有権関係をめぐる公私のせめぎ合いであった。その中で独り植樹を続けたXの活動が第4期に、日本さくらの会の承認を経て、共同管理主体「大鹿村桜の会」結成へと至った。

この整理からさしあたり、2点のことが言える。まず、岩塊台地は初めからサクラ公園を目指して整備されていったのではないということである。サクラがこの場所の主要素となったのは、Xの個人的行為と外的団体の承認によるところが極めて大きい。一方でこの場所が、共同管理主体が現れないままに「大鹿の公園的存在」となったのは、多くの村民が様々な草木の植え付けを通して関係性を構築していったからである。これらの出来事は本事例において連続して発生していたが、それは必然的なことではない。これと関連して2点目に、本事例においてサクラが表現するものは少なくとも2つある。1つは「日本人とさくら」であり、その一環として大西台地のサクラが評価されたことが、現在の共同管理に直接つながっている。一方、第2期からサクラが植えられたのは多種多様な花木の1つとしてであり、その「綺麗」は常に「慰霊」とセットであった。

すなわち、「公園的存在」化と「サクラ公園」化とは必然的に結びついたものではなく、後者のサクラも「日本人」との関係表象に包摂され尽くすものではない。むしろこの整理は、現在の共同管理を否定するものでは決し

てない。ただここから考察されるのは、現在の形態が唯一の必然的な共同管理のあり方ではない、ということである。災害跡に造成された地籍のない台地は、「思い思い」に発露される私的な感情や関係性を、緩やかに共有する場所として構築されたがゆえに、「公園的存在」となったのである。もちろんその後、管理の弱化する時期を迎えてしまったことも忘れてはならない。だが、もし大鹿村において今後の利用管理改善を検討するならば、あるいは他地域において参考にしようとするならば、この公園化プロセスにおける共同行為の多重性と必然性の所在とに注意を払わねばならない。

### (3) 本研究の意義について

本研究が明らかにしたことは単に、一般に流布する復興のストーリーに欠落しているものを指摘するだけのものではない。言わばそれは、公的な村史あるいは復興史が編まれる際に残された、異なるヒストリーの痕跡を探る微視的作業であった。その痕跡とは、村の復興・再建史を過去の単一的事実として確定したものとする理解を否定し、むしろ未だ確定せぬものとしての理解を求めるものである。換言すれば、今後の村のあり方を検討するにおいて、正統化された村史の延長上から離脱できない閉塞感を脱し、かつ村の履歴を無視するのでもなく、他のあり得る方向性を見出すために、この痕跡が重要となるのである。

もっとも、こうした痕跡の再発見は、しばしば苦渋を蘇らせる作業でもある。大規模災害に関わる痕跡であれば、なおのことである。被災箇所への村民共同によるサクラ植樹という歴史の構築は、被災のトラウマを集団的に昇華させるための集合的記憶の構築であろう。すなわち不可視化は不当な行為とも言い切れず、これに対して未決性を開いてみせる作業は、人々の間で幾ばくかの不安をかき立てるものでもある。

ただ、大鹿村においてはすでに様々な変化も見られ始めている。大西公園では、樹種をサクラにこだわらず、より多種の樹木を植えることで、公園としてのありように新たな方向性を示そうとする動きもある。

被災の記憶を有さない者にとって、集合的記憶の共有圏内に介入するのは容易いことではない。しかし、公的に紡がれた歴史に内在する痕跡を明らかにすることにより、上述のような様々な変化がこの地の履歴に根ざさぬものかそうでないか、その議論を開くことには寄与できるであろう。本研究が行った、異なるヒストリーの痕跡を探る微視的作業は、まさにこうしたことを志向するものであった。

## 5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 3 件)

- 1 越智正樹、地域開発・資源管理の文脈における「地元」概念の考察、観光科学、査読有、4、2012、11-21.  
<http://ir.lib.u-ryukyu.ac.jp/handle/123456789/25734>
- 2 越智正樹、山村における被災個所の観光資源化と<共>の複数性、観光科学、査読無、4、2012、57-60.  
<http://ir.lib.u-ryukyu.ac.jp/handle/123456789/25737>
- 3 越智正樹・平井芽阿里・山本達也、災害復興 50 年の山村社会再編における各種コミュニティの質的変換、京都大学グローバル COE プログラム「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」ワーキングペーパー、査読無、75、2012、1-42.  
[https://www.gcoe-intimacy.jp/images/library/File/working\\_paper/New%20WP/WP\\_NextGenerationResearch\\_75\\_OCHI\\_s.pdf](https://www.gcoe-intimacy.jp/images/library/File/working_paper/New%20WP/WP_NextGenerationResearch_75_OCHI_s.pdf)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

越智 正樹 (OCHI MASAKI)  
琉球大学観光産業科学部・講師  
研究者番号：90609801